

風と星の夜

綾野 あき

「風」は、森の中をすさまじい速さで飛んでいました。髪がちぎれそうになびきます。後ろにながれる景色はかたちを失い、にじんだように色が見えるだけです。大声でわらいながら、「風」はさらに速度を上げました。

通りしなに、葉をちぎられた木々が身をふるわせます。「風」にまきこまれた鳥たちが悲鳴をあげ、うさぎたちは長い耳をたたんで巣穴へとびこんでいきます。「風」はそれらを気にすることなく、東の湖をめざしました。

鏡のような湖のむこう岸になつかしい姿を見つけ、「風」は顔をほころばせました。びゅん、とひといきで湖をわたり、一本のカシの巨木にその細いうでをしっかりとまきつけました。

「じいさん、ただいま！」

このカシの木は、森の古老であり、どっし

りした落ち着きとかぎりないやさしさ、低い
おだやかな声の持ち主です。あらゆる面で
へ風～とは正反対ですが、不思議とうまが合
い、世界中を駆けめぐるへ風～が必ずこの森
に帰って来る理由となっているのでした。

「おかえり、へ風～。今回はどこまで行って
来たんだね？」

「海をこえて、砂漠まで。おもしろかったぜ、
どこもかしこも砂だらけで。馬の背中にはコ
ブがあるし、都市は信じられないくらいはな
やかだし、空気はへんに甘くてつんとくるに
おいがするんだ」

森の花やベリーの香りとは違う、甘くて魅
惑的なおいを思い出し、へ風～はにやりと
わらいました。

「それでも、一番おもしろかったのはやっぱ
り、砂嵐をおこしてやったことかな」

「まったく。本当におまえは乱暴者だね」

古老は、あきれたように葉をゆらしました。

「なんだよ、説教なら聞かないぜ」

「こら、森のみんなもおびえているよ。ここに来るまでも、若木をまるはだかにしかけたそうじゃないか」

「なんだか、おれが帰って来ないほうがよかったみたいない言い方だな」

「そんなことはないさ。わしはおまえに会えてうれしいよ。でも、この季節は動物も鳥も子育てしてるんだ、よけいに気づかってやらなくちゃいけないよ」

はじめはそっぽを向いていたへ風ですが、「子育て」と聞いてやや神妙な顔になりました。

「わかったよ、悪いことした。今度から早く飛ぶときは、森で一番高い木よりもっと上を飛ぶことにする」

「そうしておくれ。・・・ああ、おまえの仲間たちも、おまえにはほとほと手を焼いているようだったよ」

へ風の顔に、怒りがひらめきました。

「あんなやつら、おれには関係ない」

「そうお言いでないよ。おまえは〈森の風〉
だろう？ その緑の衣と、緑の髪と、緑の瞳
がそのあかしだ。そしておまえの持ち場はこ
の森だ。〈海風〉も〈砂漠の風〉も、いきな
りおまえが現れて、いい顔しなかったんじや
ないかね？」

「そんなこと、おれは知らない」

〈風〉はがんこにくりかえしました。

「おれは風だ。風にはだれにも負けない速さ
と、永遠の時間があるんだ。望めばどこへだ
って行けるのに、どうして決められたところ
をぐるぐると回るだけで満足できるんだ？
おれにはわからない」

言うなり、〈風〉は古老のもとから飛び去
っていきました。ずいぶんと機嫌をそこねた
ようですが、さっきの言葉をおぼえているの
か、その速さをいくぶんひかえめなものでし
た。

「・・・まったく」

困ったような、いとしげなようなため息を

つき、カシの古老は枝をぎしりときしませました。

夜、あおむけになつてただよいながら、
へ風へは古老にあやまろうかと考えていました。

へ悪いのは、じいさんじゃなくて他のやつら
だもんなへ

悪いどころか、古老が自分のためを思つて
くれたのは、よくわかっています。いつだつ
てやさしすぎるから、思わずあまえてやつあ
たりしてしまつたのです。

よし、きちんとあやまろうと決めてがばり
と身を起こしたへ風へは、ふわりとやって来
たへ夜風へと思ひ切りぶつかりそうになりま
した。

「おい、きをつけろ！」

あやういところで上に飛んでよけたへ風へ
は、大声をあげました。

「これは失敬」

漆黒の衣をまとったへ夜風へは、同じく黒い冷たい目でへ風へを見上げました。「もつとも悪いのはぼくじゃなくて、ねむっているはずのこの時間に飛んでいる君のほうだとおもうけれどね」

へ夜風へはそう言って去ってゆき、残されたへ風へはにぎりしめたこぶしをふるわせました。そのきどった背中を追いかけてとつちめてやろうかと思いましたが、さすがに思いとどまりました。へ風へと他の風たちとの関係はよいものではありませんが、正面きつてやりあったことはまだありません。

やりあうかわりに、今日は一晩中でも飛びまわってやろう。荒々しく思い決めたへ風へは、ふと頭上をふりあおぎました。

(・・・上)

へ風へはあちらこちらに行くことは好きでしたが、今まで高さというものを気にしたことはありませんでした。それが、はるか空の上はどうなっているのだろう、などと今日に

かぎって思ったのは、昼間の「望めばどこへでも行ける」という自分の言葉を思い出したからかもしれない。

「風」はとん、と宙をけりました。ぐんぐん上にのぼってゆくと、しだいに空気がうすくなるのを感じます。苦しいなどということはありませんが、やや頬が痛いと感じました。ちらりと見下ろせば、森は影すらも見えません。おそれ知らずの「風」も思わず不安になって、さてどこまで行こうと視線を上にもどしたとき、自分の真上の影に気づきました。

「うわっ」

「風」の声が、冷たい夜空にひびきます。けれど目の前の男は、ぴくりとも動きませんでした。なぜ今まで気づかなかったのかと思うほど、まばゆい光を放ち、それとはうらはらに無表情にうかんでいるだけです。

「おい」

声をかけてみましたが、やはり返事はありません。姿かたちは、「風」たちと同じく人

に似ています―もつとも〈風〉はいつも、人が風に似ているのだと思っと思っていますが―が、金色の衣に、金色の髪と瞳を持っており、もちろん人でなければ、〈風〉の仲間でもありません。

「おいってば」

やや声を荒げても、やはり無反応です。こいつは〈夜風〉と同じくらい嫌なやつで、さらに〈夜風〉より不気味なやつです。あたりを見わたしてみると、同じようなやつらがいだをあけて、ぽつりぽつりとういています。おたがいに話しをするでもなく、ひざをかかえてじっとしている姿に、〈風〉は胸の底がひえるような気がしました。

せつかくはるか高みまできましたが、ここは存外つまらないところですよ。そのうえ、なんだか気味の悪い場所でもあります。同じ広大な場所でも、海や砂漠はもつとわくわくしますのに。これでは古老へのみやげ話もありませんし、二度と来ないでしょう。〈風〉は

さっさと森に帰ろうとしました。

「・・・ねえ」

今にも矢のように飛び出そうとした瞬間、かぼそい声がとどいて、〈風〉はぎりぎりのところで止まりました。

（おれを・・・呼んだか？）

「ねえ、あなた・・・そのあなたよ、緑色のあなた」

この空で緑色といえ、〈風〉のことだけです。きよろきよろとさがすと、ややはなれたところで金色の少女が手招いているのが見えませんでした。

「なんだよ」

近寄ってみると、少女もまた金の衣と髪と瞳を持ち、かがやいていました。まぶしくないように少し距離をとると、そのもろそうな顔立ちが見てとれました。ほほえんでいるからか、他のやつらのように丸まっているのではなく手をふったせい、そう不気味には見えませんでした。

「あなたはだれ？　あなたのようなもの、見たことがない」

「おれはへ風～だ」

「カゼ？　カゼとはなあに？」

「へ風～は飛ぶんだ。おれが飛ぶことで、空気がふるえ、葉がちり、花びらが舞う」

「あなたの言うこと、ほとんどわからないわ。でも、あなたがこちらに来たとき、大気がゆれたのがわかった。頬にふれたもの」

少女があまりにうれしそうなので、へ風～は少女にむけてついと指をふりました。そよ風がふき、金色の髪をゆらします。少女は目を見開き、まあとはしゃいで笑いました。

「あなたはどこから来たの？」

「ずっと下から。ふつうの風は、こんなところには来ない。おれはすべての風の中で、いちばん早く、いちばん高く飛べるんだ」

「まあ、すごいよね。それにあなたの緑の衣や髪や瞳はとてもきれいだわ。とても変わっているけれど」

「おまえの金色の衣や髪や目のほうが変わっている。おれのいるところには、そんな色のやつらは全然いない」

「あら、ここにはこんなにいるのに」

散らばる者たちは、ふたりの会話にもなんの興味もないようでした。やっぱり不気味だとへ風〜が考えていると、ふいに少女がささやきました。

「ね、あなたには私たちが何かわかるの？」

「いや、わからない」

「じゃあ、どうしてたずねないの」

ふいにへ風〜は、光を放つ少女とむかいあっているのが居心地悪くなりました。質問してやろうかと少女の目を見ましたが、その色はへ風〜にはまぶしすぎました。

「・・・おれは、もう帰る」

少女は目に見えてがっかりしました。それにちくりと胸が痛みましたが、へ風〜はくりとむきをかえ、下方にむけて飛び出しました。

後ろから、気をつけてねとささやきが聞こえたような気がしました。

「それは〈星〉だね」

あくる朝、昨日怒って飛び出したことなど忘れて、〈風〉は古老にむかって、はるかな天上で出会った金色の彼女について勢いこんで話していました。

「へえ、〈星〉ね」

森から見上げる星々はただまたたいているだけでしたが、あんなふうに話したり笑ったりすることもできたのです。もっとも、それをしたのは彼女だけで、ほかの星たちはただまっつて光っていただけです。

「ずいぶんと遠くまで行ったものだ」

「だろ」

〈風〉は得意になって胸をそらしましたが、そのおかげで、昨日のやりとりを思い出してしまいました。

「あのさ、じいさん。昨日はごめんな。おれ、

言いすぎた」

古老はそよそよと葉をゆらし、やさしくわらいました。

「気にするでないよ、わしも気にしておらんだ。ただ、この世界はおまえにはせますぎるようだ」

「かもな：いや、そうでもないかも」

星があのようなものだど、〈風〉は知りませんでした。あの〈星〉が地上について何も知らなかったように、空には〈風〉にとって未知のことがたくさんあるのでしよう。

「少し、おもしろいものを見つけたよ」

古老のたくましい枝にこしかけ、足をぶらぶらゆすりながら、〈風〉は陽気にざわめきました。

「よかった。昨夜はとつぜん帰ってしまったから、もう来てくれないかと思っていたの」

日があるうちは古老とおしゃべりしたり森をまわったりして、月がつめたくかがやきだ

すころ、〈風〉はまたのぼってきていました。大気はあいかわらずさすようで、〈風〉のやわらかな緑の衣ではそのつめたさをふせぐことはできませんでしたが、まぶしさには少しなれたのか、〈星〉とまっすぐに目を合わせることができました。

「ねえ、あれをちようだい」

「あれ？」

「昨日してくれたでしょう、また大気をふるわせてほしいの」

そんなものか、と〈風〉は指をふりました。さざなみのような空気のゆれが、〈星〉のもとにとどきます。〈星〉はそれをとらえようと手をのばしました。

「ふれることはできないのね、なんて不思議なの」

「おまえの光だって、手でさわることはいかないじゃないか」

「でも、私の光には金という色があるわ。あなたのこれは、目で見ることもかなわない」

へ星へがあまりにたあいもなくよろこぶので、へ風へはさつきよりも大きく手をふりました。やや強い風がまきおこり、へ星への髪をゆらしませす。それに合わせて金粉のような光があたりにもまきちらされ、へ星へは笑い声をたてました。ほとんど大声とわいていいほどでしたが、ほかの星々はやはり、見むきもしませんでした。

「：風には色もてざわりもないが」

ふと思いついて、へ風へはつぶやきました。

へ星へが身をのりだしてくると、やはりまぶしくて、さりげなく目をそらします。

「においならあるぜ」

「におい？」

「そう。おれが森を駆ければ、花と葉のにおいがする。砂漠へ行けば、砂と香辛料のにおいがする。海の上を飛べば、潮と魚のにおいがする」

「すてきだわ。そのどれもを、私は見たことがないけれど」

「へ星」は夢見るように、空へと視線をなげかけました。

「こんなつめたい場所ではだめね。せっかくだれよりも速いあなたなのに、なんの香りもはこぶことはできないわ」

ややうつむいた「へ星」に手をさしのべかけ、
「へ風」はあわててひっこめました。

「明日、おまえに花をもってきてやるよ」

「ほんとう？」

「ああ。きれいな色の、あまく香る花だ」

うまいこと落ちている花をひろえればいいのですが、なければつまないといけません。それは古老がいい顔しないだろうと思いましたが、「へ星」のきらきらした様子を見れば、とりけすことはできませんでした。

「うれしいわ。花もうれしいけれど、あなたが次の夜も来てくれることはもつとずつとうれしい」

「へ風」は口ごもり、そうか、とだけ言いま

した。

次の夜、へ風へは昼のうちに見つけておいた花をだいに持って、空を急いでいました。つごうよく落ちていた花はうすいくれない色で、まだ大地に根ざしているかのようにみずみずしく、あまい香りを放っています。

「君、ちよつと待ちたまえ」

早くへ星へに見せてやりたいと急ぐへ風に、声がかけられました。しかたなく見下ろすと、そこにいたのはへ夜風へでした。

「なんだよ。おれは急いでるんだ」

「へ星へのところに行くのだろうか？」

「どうして知っている」

「知っているさ、昨日の夜もその前の夜も、きみは天へと駆けて行った」

「だからなんだ」

「へ星へとはもう、かかわらないほうがいい」

ふいをつかれて、へ風へは一瞬だまりこみ

ました。

「：どうして」

「どうしてもだ。それが君のためだ」

「ふざけるな」

「ぼくは君が気に入らないが、それでも君は同族、仲間だ。だから忠告しておく」

ひたすらつめたかった黒い瞳に、そのとき初めて、かすかなやわらかさがやどりました。

「へ星」には二度と、会いに行ってはだめだ」

へ星はへ風が持っていた花を、とてもよろこびました。においをかいだり、やわらかな花びらに頬をすりよせたりと、感激することしきりです。その様子を、へ風は重苦しい気持ちでながめていました。

へ夜風は何が言いたかったのでしょうか。

「どうかしたの」

ぼんやりしていたへ風は、金色の瞳にまじまじと見つめられてはっとしました。

「いや、なんでもない」

「今日のあなたは何かおかしいわ。元気がないもの」

「そんなことはない。あまりにおまえがはしやぐから、口をはさめなかつただけだ」

「まあ、わたしのせいだったのね」

「星」はその頬を、花びらのような淡い紅にそめました。その様子を見ると、「夜風」の忠告などとるにたりないもののように思えてくるのでした。

「風」は「星」に会いに行くことはやめませんでした。何度もかよううちに、そのままゆさにもすつかりなれ、「星」と視線をまじえることは簡単になりました。「風」の語るたあいのない地上の様子を「星」はうえたように聞き、すんだ声で笑いました。そうすると「風」も何かおもしろいものはないかと森の中をさがすようになり、自然と乱暴に飛ぶことはなくなりました。森の住人たちもひと

安心と行ったところです。

みちたりた日々でしたが、時おり会うへ夜風へだけが、悲しげな顔をしていました。

へ風へはつとめて気にしないようにしていましたが、その忠告は忘れてくても忘れられないものとなっており、古老にも話せないとげとして、その胸にひっかかっていました。

そんなある夜、へ風への話をききおえたへ星へは、はじめて口にする言葉をつぶやきました。ここは退屈だ、と。

「私、ここから動くことができないのよ。とても退屈だわ、ここはつめたいだけで、何もないもの。自由なあなたがうらやましい」

へ風へも本来ならば好きに飛んでいいのは森だけです。へ風への自由はかつて気ままのあかしです。ですがそれは言わないでくださいと、へ風へはひっそり決意しました。

「動けないのか」

「そうよ、私にできるのは、ここにいるまま手足を動かすことくらい」

「…でも」

「風」は首をかしげました。

「あいつ、いなくなっただじやないか」

「風」がはじめに会った星です。あの星はいつのまにやら、もといた場所から消えていました。

「…彼はね、『落ちた』のよ」

「風」の問いに、「星」はすうっと色をなくし、ささやくように答えました。

『『落ちた』？ それはなんだ？』

「どの星も、いつかは光をうしなって落ちるの。最後の力でかがやきながら、まっさかさまに落ちてゆくのよ」

「落ちるとどうなるんだ」

「わからない。でも」

「でも？」

「私も、もうすぐよ」

「風」は息をのみました。

「うそだ」

「いいえ、うそじゃない。私の光、どんどん

弱くなっているもの。あなただって、はじめほどまぶしくないでしょう？」

「風」がやすやすと「星」を見つめられるようになったのは、なれたからなどではなかったのです。「風」は自分のおろかしさにはらが立ちましたが、口ではこんなことを言いました。

「そんなことはない、おまえは変わらない」

「星」はよわよわしくほほえみました。

「それは「流れ星」になるということだね」
まだ夜明け前にもかかわらず、「風」は古老をたたき起こして、「落ちる」ことについてたずねていました。

「でも、流れた先でどうなるかは、わしにもわからんよ」

「そんな」

「すまないね。わしはこの森のことならなんでも知っているし、この枝のとどくところの空にもくわしい。けれどわしは、夜の住人で

はないんだ」

うなだれる〈風〉の頬を、古老はそつと緑の葉でなでました。

「夜のことは〈夜風〉におきき。おまえたちの仲が悪いことは知っているが、おまえにとつて〈星〉が大切ならば、それくらいはできるだろう？」

きちんと決まりを守る〈夜風〉は、夜にかあらわれません。その日一日をそわそわとすごした〈風〉は、日がしずむなり〈夜風〉をつかまえました。

「だから忠告しただろう」

「そんなことより、落ちた〈星〉がどうなるのか教えてくれ」

「：星は海に落ちる。海の底でながいながいねむりについて、光をとりもどしたころ、ふたたび空にのぼるんだ」

では、待っていればよいのです。〈風〉は安心して顔をかがやかせましたが、〈夜風〉

はうかない顔のままでした。

「でも同じ空にはもどらない。きみの〈星〉は、二度とこの森の空にはもどらないんだ。

それに、星々のねむりはふかく、ながい―永遠の時をもつぼくたちからしても、ながい―

きみは待てるかい？ と〈夜風〉は静かにたずねました。

「待てる。おれたちには永遠の時間があるんだから」

「けれど、ねむりからさめても、また会えるとはかぎらない。どこの空に行くかわからないのだから」

「さがせばいいだけだ」

「さがしているあいだに、またねむりの時が来てしまったら？ 星々が空にいるのは、ねむりの時間にくらべてとても短い―わずかなかがやきの時間と、ながいねむりの時間をくりかえしながら、星々は空をわたってゆくんだ」

〈夜風〉の声はひどく悲しげでした。

「星と出会った風は、きみが初めてじゃない。ぼくは知っているよ、空をうつろう星をさがしつづけて、でも見つからなくて、悲しみのあまりきえてしまった風がいたことを」

「：おれは」

少しためたらって、それでもへ風へははつきりした声で言いました。

「おれは待てるし、見つけてもみせる。おれほどの風よりも、高く速く飛ぶことができる。だから、必ず」

へ風へはただほほえみました。黒い瞳をほそめて、そして飛んでいきました。

「よう」

「来てくれたのね」

へ星へは今夜も金色でしたが、たしかにその光はうすくなっていました。

「ね、私、こわいわ」

ふいにささやいたへ星へは、手をのばしてへ風への手にふれました。ふれあうのははじ

めてのことでした。が、〈風〉はその手をにぎりかえしました。かがやくその手はつめたく、それでいてもえるようでした。

『落ちる』のがとてもこわいの」

「心配いらない」

〈風〉はささやきかえしました。

「おれもいっしょに『落ちる』から」

それに、落ちてそれつきりじゃないーと続けようとしたところで、〈星〉のからだがかしぎました。しっかりつないでいたはずの手がはなれて、〈星〉が爆発するように光を放ちました。

まっさかさまに落ちる〈星〉とほぼ同様に、〈風〉も飛び出したはずでした。けれどすさまじい速さで墜落する〈星〉との距離は、どんどんひらいていきます。歯をくいしばり、〈風〉もまた今までにない速さで飛んでいました。まきおこる風はするどく、〈風〉の頬をきずつけ、その衣をきりさきました。それでも〈風〉はもっと速く、もっともつと速く

とへ星を追いかけました。

ふいに、潮のかおりがしました。空の上で言えなかったこと―見つけてみせるから心配いらないと告げたかったのに、もう海に出てしまったのです。

祈るようなきもちで手をのばしても、とうていとどきません。けれどその時、あまりのまぶしさに輪郭すら失っていたへ星の顔がふいに光の中にうかびあがりました。金色の瞳はあまく笑い―そして、海にきえてゆきました。

へ風は息をのみましたが、ためらうことなく海にとびこみました。水の中など、来るのははじめてのことです。必死にもぐった海の底に、へ星はいました。目をとじ、金色の髪をゆらして、静かによこたわっています。安心させてやりたかったのに、へ風はまにあわなかったことを悟りました。

へ星がねむる姿を、へ風はしばらく見つけていました。次に言葉をかわせるのは、

いったいいつになるのでしょうか。ふれた頬はただつめたく、空の上でのもえるようなかがやきはありませんでした。

「風」が海の底を去るには、それからもう少しの時間がかかりました。

森に帰ると、古老が起きて待っていてくれました。いつも「風」がすわっている枝には「夜風」が足を組んですわっています。

「おかえり、「風」。つかれたろう」
むちやな飛びかたをしたせいかな、「風」はくたくたでした。

「だから言ったじゃないか。「星」には近づくなつて」

「こら、「夜風」。およし」

古老にぴしりと言われた「夜風」は気を悪くした様子もなく、ふわりと枝からはなれました。かわって「風」がそこにうずくまります。

「君、これからどうするんだい」

「ときどき様子を見に行く。それ以外はべつにいつもどおりだ」

「見に行くって、海の底に？ あそこは苦し
いだろう」

「おれは平気だ。だいたい見に行かなきゃ、あいつが空にもどったかどうかわからない」

「へえ、さすがだね」

「それで？ 彼女が空にもどったらさがしに
行くのかい？」

「もちろんだ」

「世界中をかけめぐることになっても？」

「おれには簡単なことだ」

へ風～自身も、口で言うほどたやすくはな
いと思っていきました。けれど、あきらめるつ
もりもないのです。

「まあ、きみが好きかってに飛びまわること
なんて今に始まったことじゃない。やりたい
ようにすればいい」

「言われなくてもそうする」

思わずけんかごしになったへ風～ですが、

〈夜風〉はさらりと受け流しました。

「そろそろ夜が明ける、ぼくはもう行くよ」

静かに去っていく〈夜風〉を見送ることな

く、〈風〉は古老にもたれかかりました。

『落ちて』ゆくのがわしにも見えたよ」

「おれ、追いつけなかったんだ。いつしよに落ちてやるって言ったのに」

たしかに手をつないでいたのに、どうしてはなしてしまったのでしよう。

「そう落ちこむものじゃない。次こそ、そばにいてやればいいだろう？」

「次、か」

「何度でも、くりかえすと決めただろう？
出会って、語らって、『落ちて』別れること
を」

〈風〉はただうなずきました。次の時までには、あの速さに負けないようになっていなければいけません。それに、彼女がねむっているあいだのことを話してやれば、どんなによろこぶでしょう。

へ星へと会えなくても、へ風への毎日はつ
づきます。けれど今だけはこうしていよう
と、へ風へは古老のたくましい幹にうでを
まわし、ギユツとよりそいました。